

---

# 僕と君の七週間

ラリクラリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と君の七週間

### 【Nコード】

N4135BA

### 【作者名】

ラリクラリ

### 【あらすじ】

これは、君が消えてしまうまでに過ごした、僕と君の七週間の記録だ。

## 始まりの日

これは、君が消えてしまつまでに過ごした、僕と君の七週間のお話。

### 始まりの日

その日は梅雨の名に相応しく、朝から雨が降っていた。放課後になつても雨は止まず、じつとり湿った空気の中を僕らは帰る羽目になる。

「雨止まないなあ。な、裕人、明日も降ると思うか」

長尾 裕人、それが僕の名前。黒い傘を差して、雨の中を歩いている。そして僕に話し掛けてきたのは横溝 直哉。空色の傘を差して、僕の隣を歩いている。

一年生の時に同じクラスになつて以来、僕と直哉は親友だ。三四年生の時は違うクラスになつたけど、五年生でまた一緒になつた。六年生はクラス替えが無いから、来年も同じクラスだ。

「天気予報では雨だつて。それに梅雨だし、降るんじゃないかな」

朝見た天気予報を思い出しながら言つたら、直哉が不満の声を上げた。校庭で遊べないのがつまらないんだろう。どのみちこの雨じや、明日が晴れでも遊べなかつたと思うけどな。

「梅雨なんて早く終われば良いのに。雨は嫌いじゃないけどさ、こ

んなに降ってたら外で遊べないじゃん」

直哉がぶうたれる。元気が有り余ってる直哉には、雨続きの天気は辛いだろう。僕は部屋で本読む方が好きだから、気にならないけど。でも流石にこの雨はね。

「僕も、梅雨はじめじめするから早く終わってほしいな。降らないと夏場に困るのは解ってるんだけどね」

節水になるとプールの時が大変だ。シャワーの水がほとんど出てこない。

「だよな。あーあ、早く7月にならないかな。そしたらプールだ」

「直哉、いくらなんでも気が早いよ。6月になったばかりなのに」  
来月の話じゃないか。直哉にしてみたらたった一ヶ月なのかもしれないけど、僕にしてみたら後一ヶ月も、だ。

「いいじゃんか、言うのはタダだろ。じゃあな、裕人。また明日！」

曲がり角で直哉が別れた。濡れるのもお構い無しに勢い良く手を振っている。前見ないとまた電柱にぶつかるとよ。

「また明日っ」

直哉に見えるように、それなりの大きさで手を振り返す。見えなくなるまでお互い手を振って、僕はまた歩き出す。いつもの通学路を途中で脇道にそれるのが僕の日課だ。

「ただいま、サクさん」

『おゝ、お帰り裕人』

電柱の所に、甚兵衛姿の男の人が立っている。この人はサクさんちよつと透けてるけど良い人だ。ずつと前に死んじやって以来、こちら辺をさまづてるらしい。要するに、幽霊だ。

僕は昔から、何故か幽霊が見える。でも僕の両親は見えない。お祖母ちゃんは見えたらしいから、覚醒遺伝って奴かな。この事は今では両親と直哉しか知らない。お祖母ちゃんが、本当に信用出来る人にしか話しちゃいけないって言ったから。

直哉は見えないのを悔しがっていた。僕も、サクさんには会わせあげたかったから残念だ。サクさんは決まった場所しか動けないから、つまらないと思う。直哉と友達になれたら絶対楽しいのに。

『ちゃんと勉強してたか？』

「僕はね。でも直哉はまた居眠りして怒られてた」

毎日学校の行きと帰りにサクさんと話をする。朝は時間が無いから挨拶だけだけど、帰りはこうやって世間話と言つか、直哉の話をしてる。一日一回は何かやらからすから、ネタに困らないんだよね。

『授業中に居眠りとは。また勉強教えてくれって、泣きつかれるんじゃないか？』

「もうされた。直哉って懲りないんだよね。一年生の時からずっとだもの」

『そう言う裕人は、一年生の時からずっと面倒見てやってるじゃないな』

いか。裕人は優しい子だなあ』

サクさんが頭を撫でてくる。両親にされたら恥ずかしいことでも、サクさんは言ってみれば何百歳のお爺さんだから気にならない。ただ、角度を考えないから腕が傘をすり抜けてて、そっちの方が気になる。

「もう、からかわないでよサクさん」

ちよつと傘を引きつつ、ついでに頭を振って手を離す。撫でてもいいけど、からかうのは駄目だからね。直哉の勉強してるのは、そうしないと宿題しないからだよ。あれは吃驚した。先生に向かつて宿題やって来てないって平気で言うんだ。

『ごめんごめん。さ、今日は雨だからもうお帰り。風邪を引いてしまつよ』

「うん。じゃあまた明日ね、サクさん」

手を振って見送ってくれるサクさんに、角を曲がる前に一度だけ手を振って別れる。怖い幽霊もいるけどサクさんは優しいから好きだ。見た目はお父さんより若いけど、本当のお祖父ちゃんみたいに感じる。

サクさんと別れて通学路に戻って来た。家まではあとちよつと。五分くらい歩いたら、青い屋根瓦が見えてくる。もつと歩いたら玄関が見えてきて、何故かそこに直哉がいた。傘も差さずに踞ってる。何で家の前にいるの？ 傘は何処にやったの？

何で

「なお、や？」

『裕人お。俺、死んじゃった』

困ったように笑う直哉の身体は、透けていた。

これは、君が消えてしまうまでに過ごした七週間の、その始まりの日。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4135ba/>

---

僕と君の七週間

2012年1月11日01時01分発行